

スポーツ施設のプログラム評価に関する研究

—特にプログラム・ライフサイクル分析について—

○原田尚幸（大阪体育大学特別研究生） 原田宗彦（大阪体育大学）

1. 緒言

近年、人々の健康やスポーツに対する関心が高まり、いかにして健康的なライフスタイルを築き、充実した生活を営むかが重要な課題となってきた。その一方で、健康的なライフスタイルを確立するための機会や場を提供しているフィットネス産業の躍進には目を見張るものがある。しかしながら、いままで急成長を遂げてきたフィットネス産業は成長期から成熟期へと移行しはじめ、フィットネス業界は新たな局面を迎えるであろう。

また、それにつれて改善されにくいハード面よりもソフト面を充実させることは、激化するフィットネス・クラブの生存競争の中で生き残っていくための重要なポイントになってくるであろう。本研究ではソフト面の中でもクラブで実施されている体育プログラムに着目し、その参加者数の推移よりプログラム・ライフサイクル分析を用いてプログラム評価を行った。プログラム・ライフサイクル分析を用いてプログラム評価を行うことは、クラブで実施している体育プログラムがどのような状況にあるのかを把握し、的確な経営手段を講ずることにより、体育プログラムを維持・発展・修正させるために有効であると思われる。そこで、本研究では、プログラム・ライフサイクル分析を用いてプログラム評価を行い体育プログラムの現状を把握することによ

て、より良い体育プログラムの提供を行うための基礎資料を得ることを目的とする。

2. 先行研究

製品ライフサイクル (Product Life Cycle) の理論を公共レクリエーション事業の分析に適応したのはクロンプトンとヘンサリング (1978) である。彼らはライフサイクル分析を行うことによって、事業経営の現状を容易に把握するとともに将来的な予測も可能であり、しかも視覚的にわかりやすい点で有効であると述べている。ハワードとクロンプトン (1980) は、レクリエーション・プログラム経営の分析にライフサイクル理論を応用して、これをプログラム・ライフサイクル (Program Life Cycle) と呼んだ。原田と世戸 (1987) は、実際に体育施設においてプログラム・ライフサイクル分析を行い、プログラムの現状把握と経営戦略を示し、プログラム・ライフサイクル理論がプログラム経営において有効であることを報告している。

3. 研究方法

本研究では、ほぼ全国に拠点をもち、幼児から成人までを対象とした体育プログラムを実施しているYMCAの主な施設ごとに、過去13年間にわたる体育プログラム参加者数の推移から、プログラム・ライフサイクル分析を用いてプログラム評価を行い体育プログラムの現状を把

握するとともに、ロジスティック曲線を用いてプログラムの将来的予測を行い、それぞれについて有効な経営手段を提案する。

4. 結果

プログラムのライフサイクルは、多くの場合導入期、成長期、成熟期、飽和期、衰退期の5つの段階から成っており、各段階に応じて経営手段を検討・決定することが可能である(図1参照)。図2は大阪にあるAブランチにおける過去13年間の小学生を対象にした体育プログラム参加者数の推移を表したものである。この体育プログラムは1981年までを導入期とし、81年から87年までを成長期、87年から成熟期に入っていると考えられる。成熟期には成長期のような参加者数の増加はあまり期待できず、増加率は減少傾向にあると言える。図3は、九州地方にあるBブランチにおける過去13年間の中高生を対象にした体育プログラム参加者数の推移を表したものである。この体育プログラムは、1983年までを導入期とし、83年から85年までを成長期、85年から成熟期、飽和期を飛び越してすぐ衰退期に入っていると考えられる。衰退期にはプログラムに対して何らかの経営手段を講じて延長させるのか、あるいはプログラムを廃止するかなどの判断を下す時期である。このように、プログラム・ライフサイクルには様々なパターンが存在し、導入期、成長期、成熟期、飽和期、衰退期の各時期に応じた対応策が考えられる。発表当日は、さらに詳しい結果報告を行うとともに、プログラム・ライフサイクル分析を用いたプログラム評価の有効性と問題点について考察を加える。

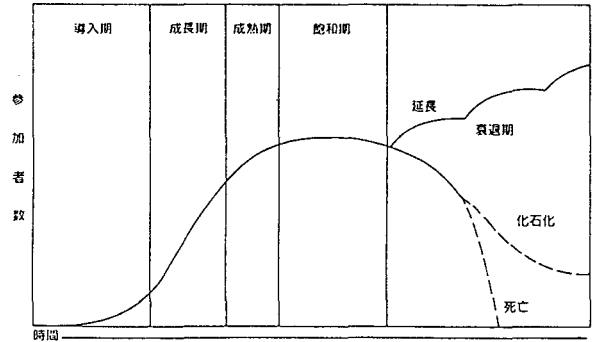


図1 プログラム・ライフサイクル
(クロンプトンとヘンサリング 1978)

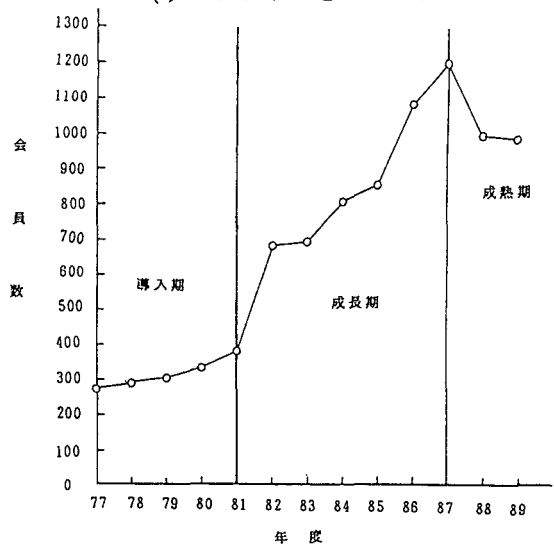


図2 Aブランチにおける
小学生プログラムのライフサイクル

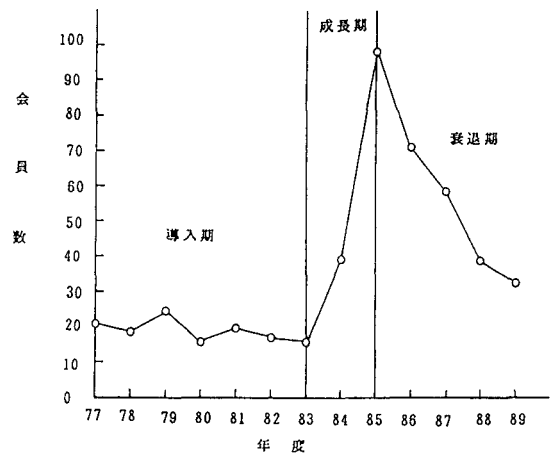


図3 Bブランチにおける
中高生プログラムのライフサイクル